

# 時代を讀む

内山 節



東日本大震災の詳細を、私は滞在先のフランスで聞くことになった。ヨーロッパ各国の新聞は紙面の半分を日本の報道にさき、世界はこの大災害への驚きと恐怖を共有しているかのようだった。津波とその被害が中心だったニュー

スは、次第に福島原子力発電所の事故へと重心を移し、そのことがヨーロッパ各国の反原発運動を、再び高めることになった。

大震災から一週間ほどがたつと、ふたつのニュースが記事のなかにふくまれるようになる。ひとつは反原発運動の

高まりを警戒する政府からの意志表明であり、もうひとつは、これほどの大災害を受け

## システム依存からの脱却

なシステムに依存して暮らしている。電気をはじめとするエネルギーの供給システムも

そのひとつだし、携帯電話やインターネットなどの情報通信システムにも私たちは依存している。医療システムや年金・社会保障システム。多くの人が企業システムのなかで働き、その企業は市場システムに依存する。子どもたちは教育システムのなかで暮ら

ながら冷静に対応していく「驚くべき日本人」を報じるもので、これは日本に駐在する特派員から伝えられたものであった。そしてそのことが、現代社会が問わなければならない課題を、かすかに垣間見させていた。

今日の私たちは、さまざま

している。

ところがそのシステムは、何らかの想定範囲内で維持可能なように、設計されているのである。ある程度の経済成長がつづくという想定の上に、市場や年金・社会保障システムなどが設計されているように、あるいはエネルギー

くめて、この数年に世界でおこっていることは、システムの前提になっている想定が人間の思い込みすぎなかったという事実の暴露であった。そうして想定と現実が合わなくなったとき、市場システムも、年金・社会保障システムも、混乱をみせはじめた。

この事態に対して現在の体制を守ろうとする人々は、システムの維持や復旧に全力をあげようとする。フランスなどの国々が、反原発意識の高まりに警戒心を示すのも、現在のシステムの維持に目的があるからである。

ところが今回の災害時にも示されているように、「想定外」の事態がおこり、システムが崩壊したとき助けになるものは、人々の冷静な行動であり、支え合おうとする人々

の意志と働きなのである。福島原発でも、これ以上の災害をくい止めようとしていたのは、電力システムではなく、自己犠牲的に自分の労働を提供する人々もたらしている。被災者を支えているのも、他者のために頑張っている人々の努力である。想定にもとづいてつくられたシステムは、想定外の事態がおきた瞬間に崩壊する。それに対して、支え合い結び合う人間たちの働きは、どんな事態でも力を発揮する。すると未来の社会は、どんな方向にむかうべきなのか。それはシステムに依存しすぎた社会からの脱却であろう。私たちに求められているのは、人間の結び合いが基盤になるような社会の創造である。

(哲学者・立教大大学院教授)